**主体と象徴界**

**――セミネール2巻を読む――**

**片岡一竹**

　**はじめに**

セミネール2巻『フロイト理論と精神分析技法における自我*Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*』（以下、『自我』）は、まだフランス精神分析協会（S. F. P., Société Française de Psychanalyse）の分析家養成課程の一環として、地道なフロイトの読解の性格が強かった50年代前半のセミネールにしては珍しく、ハイデガー、レヴィ＝ストロース、キルケゴール、プラトン、またポー、モリエール、ソフォクレスの小説（戯曲）、さらにサイバネティクスなど、精神分析の分野に属さない膨大な文献を参照しながら進められたセミネールであり、自らの理論に対するラカンの意気込みを読み取ることができる。その意味でこのセミネールは「思想家」としてのラカンの姿を垣間見ることができるものであるが、そのために内容は雑多でまとまりを欠き、出席者の発言にも困惑やすれ違いを見て取ることができる。

　だがそれでも、現在このセミネールがもっとも多く引用されるラカンのテクストの一つであることに違いはない。しかしながら、そのために『自我』、またその1955年4月26日の講義「『盗まれた手紙』」（以下、S2LV）を基に執筆された論文「『盗まれた手紙』についてのセミネールLe séminaire sur《la Lettre volé*e*》」（以下、ELV）のみをラカンの代表作と見なしてしまい、それだけでラカンの教育活動enseigementの全てを語ろうとする性急な試みを見て取ることもできる[[1]](#footnote-1)。しかし例えばラカンの主要概念である対象aなどは、このセミネールの時点では未だ存在しておらず、ラカンの主要な関心は精神分析理論への象徴界le symboliqueの導入にあって、現実界le réelの議論についてはいまだ練り上げが進んでいない状態にあった。

したがって私たちは、むしろこのセミネールから読み取るべきことを制限しなければならないとも言える。そのためには、ジャック・ラカンの理論的変遷[[2]](#footnote-2)の中にこのセミネールの議論を適切に位置付け、他の時期の議論との差異化を図ることが重要であろう。そのことによって、一般的に理解されるラカン像から眺めた際にともすれば奇妙に映る議論についても、納得できる理解を得られるはずである。それとともに『自我』に代表される50年代前半[[3]](#footnote-3)のラカン理論が目的とする精神分析の営みについても明らかになるはずである。

本稿は4節から構成される。第1節では『自我』の議論について基礎的な解説を提示する。第2節では『自我』の中心的な主題でありながら、後のラカン理論を知るものには奇妙さを覚えさせる、快原理の彼岸（反復強迫、死の欲動）の議論について、セミネール7巻『精神分析の倫理』（以下、『倫理』）やラカンの初期の仕事と比較しながら、その意義の解明を試みる。第3節では『自我』の議論の明確な理解のためにS2LVとELVを読解する。第4部では、『自我』におけるラカンの『コロノスのオイディプス』の読解に注目することで、『自我』における精神分析の目標を明らかにする。その途上で『倫理』における『アンティゴネー』の読解を参照し、両者の理論的差異を明確化する。

**1．象徴界と無意識の主体**

　前述したように『自我』で語られた内容は多岐に亘るが、だが私たちはその内容の要旨をELVの冒頭に見出すことができる。

私たちは研究によって、反復自動症（反復強迫*Wiederholungszwang*）は私たちがシニフィアン連鎖の執拗さinsistanceと呼んだものにその基礎を置いているという理解に至った。私たちはこの考えをex-sistance（つまり中心から外れた場所）に関連したものとして抽出したが、私たちがフロイトの発見を真剣に捉えるならば、必然的にこのex-sistenceに無意識の主体を位置付けなければならない。周知のように、いかなる遠回しの想像的手段によって象徴界le symboliqueが、生体のもっとも奥深い隠所においてさえ定着するのかを把握しなければならないのは、精神分析によって創始された経験においてである。

　想像的な諸効果は、それらを束ね、導く象徴連鎖に関連させられない限り、分析経験の核を表すどころか、私たちにどんな一貫性も与えてくれない――このセミネールの教育活動は、そのことを主張するために設計されている（E: 11）[[4]](#footnote-4)。

　ここで繰り返し主張されているのは、想像界l’imaginaireに対する象徴界（シニフィアン連鎖）の優位である。そしてシニフィアン連鎖とは「ex-stance（中心から外れた場所）」であり、それは無意識の主体が位置付けられるべき場所であるという。そしてそこに反復強迫が基礎を置く。

　このことを詳しく解説してみよう。前述の通り、このセミネールの主題は「自我moi」であるが、それは批判的に考察されており、真のテーマはむしろ（これはラカンのテクスト全般に当てはまるが）「主体sujet」であるといえる。主体はラカンにおいてもっとも重要な概念のひとつであるが、ここで重要なのは、ラカン理論における主体とは常に「無意識の主体」であり、脱中心化されて考えられているということである。それはこのセミネールにおいてもあてはまる。ラカンはこう述べている。「私が説明しているのは、人間は象徴の動きの中に、象徴的世界の中に組み込まれている限りにおいて脱中心化された主体であるということです」（S2: 63／邦訳上巻76頁）。

　どういうことか。50年代前半のラカンの教育は、自我を中心として考える自我心理学などの学説に対する反駁であり、自我は想像界に属する[[5]](#footnote-5)二次的なものとして捉えられ、むしろ無意識の構造を表すランガージュが注目されていた。「無意識は一つの言語のように構造化されているL'inconscient est structuré comme un langage」というテーゼは、この50年代前半のラカン理論に最も当てはまるものである[[6]](#footnote-6)。この言語langageの領域を示すのが象徴界であり、それはシニフィアン連鎖において捉えられている。ラカンのいう無意識の主体は、こうした無意識のランガージュの領域において自らを語る主体である。「自我のシステムから締め出され、無意識において、主体は語るのです」（S2: 77／邦訳上巻95頁）。すなわち人間にとって最も中心的なものと思われる自我は実は二次的なもので、無意識的な象徴秩序に統御されており、そこにこそ主体というものが位置するというわけだ。

出典 : Lacan, J. *Le séminaire LibreⅡ Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*(Seuil, 1978, p. 284)

　象徴界の理論はレヴィ＝ストロースの影響なども受けて考案されており、構造主義でいうところの「構造」に相当する。ここでのラカンは多分に構造主義者の印象が強いことが見て取れよう。もちろんラカンは想像界と象徴界に留まらず現実界の領域も提示している。しかしそれは、ラカン派の議論において主流な「象徴界の彼岸としての不可能でトラウマ的な『無』の領域」という60年代的な概念ではなく、むしろ物理学で記述されるような、意味から独立した領域という性格が強い。また現実界の不可能性についても「肺炎は現実界の病である」（象徴界の及ばない箇所に原因があるので精神分析では対処できない）というような意味で用いられており、ほとんど取り上げられていない。ここでのラカンの主眼はあくまで象徴界の導入にある[[7]](#footnote-7)。

　象徴界と想像界の関係を最も的確に表しているのは、かの有名なシェーマLであろう。この「L」はラカンの姓の頭文字から取ったとも言われ、この図に対するラカンの意気込みが伝わってくる。

　Sは主体、Aは大他者Autre（ここでは端的に象徴界と考えてよい）、a’は小他者autre、aは自我である。a－a’の軸が表すのは想像的関係であり、これは鏡像段階のような双数＝決闘duel関係である。自我egoは根源的に他我alter egoであり、他者のイマージュによって自我が成立する。しかしこの二者関係は、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法のごとく主人と奴隷が目まぐるしく入れ替わるような不安定なパラノイア的領域であり、第三者の介入が必要となる。この第三者が象徴界であり、上の図でもAからaに向かって矢印が伸びている。このため自我は象徴界の影響を受け、そのために症状などの抑圧されたものの回帰が見られるのだ。

だがこの想像的関係の軸はひとつの抵抗としても働き、AからSに向かって伸びる無意識のパロールが、想像的軸によって阻害されている。自我のような想像的領域は端的に抵抗の場であり、そのために無意識のパロールが見えにくくなっているものである。自我心理学はこの自我を強化していくことを目的としていたが、ラカン的精神分析においてはむしろこの自我が克服されなければならない。ラカンはまた「分析家を養成するのは、自我がないような主体を造り出すためです」（S2: 287／邦訳下巻123頁）とまで言っている（もちろん、それは理想であり実際にはあり得ないと付け加えているが）。それはいわばAから伸びた軸がSに到達することと解釈できよう。

　こうした想像的軸の抵抗を乗り越えて無意識のパロールを捉えることは、同時に無意識の主体を発見することでもある。「このことは、自律的だと想定される自我が〔……〕分析家の自我に支えを見出したり、次第に強くまとまりのある賢い自我になっていったりするというようなことを意味するのではありません。そのことが意味するのは、反対に、自我がそれでなかったところのものになるということ、つまり自我が主体のいる点にやってくるということです」（S2: 374／邦訳下巻260頁）。すなわちここでは、自我―想像界から主体―象徴界への移行が語られている。そしてラカンは、それを快原理の此岸と彼岸の関係において捉えている。どういうことだろうか。

**2．障壁とその彼岸**

ラカンにおける快原理の彼岸（死の欲動、反復強迫）の議論についての解説は、現実界に関連させて行われることが多い。すなわち象徴界に欠如として空いたひとつの穴としての現実界が快原理の彼岸であり、象徴界―想像界のシステムはこうしたトラウマ的な現実界に対する防衛であるとされる。そしてこの現実界からからやってくる享楽jouissanceが死の欲動の満足としてまた快原理の彼岸に相当するという。

しかしこうした議論の多くは『倫理』ないしそれ以降の議論をもとにしたものである。『自我』においては、象徴界はむしろ自律し完成した領域として捉えられており、いわば穴が開いていない。議論を先取りすれば、S2LVとELVの本編を締めくくる「手紙はつねに宛先に届く」という一文は、こうした象徴界の自律性の強調である。それゆえ快原理の彼岸もまた、ここでは象徴界に関連させられている。

　反復強迫について言えば、ELVの冒頭で述べられていたように、それはシニフィアン連鎖の執拗な自己主張（insistance）に重ね合わせられている。つまり象徴化が不十分であるため無意識に抑圧されたシニフィアンが執拗に回帰し、症状などの無意識の形成物が生まれるというわけだ。例を挙げるならば、借金の返済に追われていた男が首に強い痛みを感じ、とても**首が回らなくなる**というような症状であり、ここでは「（借金で）首が回らない」というシニフィアンが回帰し、症状が形成されているのである[[8]](#footnote-8)。

　死の欲動については、フロイトがこの概念を導入したのは「生きた存在の死」ではなく、「人間の体験、人間的交換、間主観性」（S2: 103／邦訳上巻135頁）であるとされている。つまり人間について、それ自体の生命の範疇だけで語りつくすことはできず、個体の生命の限界の彼岸にある領域について語ることが必要となり、それが他者と共有する象徴界であるというのだ。

　しかし村井翔も指摘しているように（村井2007: 11）、この議論にはいささか無理があるように思える。死の欲動は本来トラウマ的で危険な捉え難い領域であるが、それがここでは象徴界という完結したシステムに落とし込まれている。ここには行き過ぎた構造主義を見て取ることもできるかもしれない。なぜ当時のラカンは、こうした奇妙ともいえる議論を展開したのだろうか。

『自我』のセミネールは、シェーマLが導入されたことに代表されるように、ラカン理論におけるひとつの転回点である。その点においてこのセミネールは、〈もの〉の概念が導入され60年代ラカン理論の嚆矢となった『倫理』のセミネールなどと類比的に読みうるものではないだろうか。つまりそこで行われているのは文字通りの「ラカン対ラカンLacan contre Lacan」、つまり自らが過去に構築した理論との対決である。

『自我』のセミネール以前にラカンが構築した主体形成理論は、鏡像段階によるものである。これは50年代の理論においては想像的で二次的な「自我」の誕生の契機とされているが、元来は象徴界の支持を必要とせずに、それ自体で主体を形成する理論であった。それは、『エクリ』に収録された鏡像段階についての論文「精神分析の経験によって示される、〈私〉の機能を構成するものとしての鏡像段階」が、「自我moiの機能を構成するもの」ではなく「〈私〉jeの機能を構成するもの」と題されていたことからもうかがえる。周知のように、フロイトの「Wo Es war, soll Ich werden」という格率について、ラカンはEsとIchを固有名詞ではなく代名詞として解釈し、「エスがあったところに自我（moi）をあらしめよ」ではなく、「それがあったところ、そこに私（je）が生じなければならない」と訳した。この「私」とは対象として捉えられた想像的な自我ではなく、むしろ無意識の主体の側にある。このようにラカンにおける〈私〉は、むしろ客体（対象）と主体に分裂した主体（）の片割れを示すものであり、自我とは決定的に異なったものである。したがって「鏡像段階」もまた、自我ではなくむしろ主体の誕生の契機として考えられていたことがわかる。

「鏡像段階」の時期のラカンは「イマーゴimago」という概念のもと、後に想像界と呼ばれるようになるものの働きによって精神分析を捉えており、例えば分析経験を心的原因固有の現実において再現されたイメージの再構成として捉えていた。つまり鏡となった分析家に対して患者が自らのイメージを投影し、分析家がこの破壊され、拡散されたパラノイア的イメージの歴史的起源を命名して患者に帰してやることによって、イメージが現実から分離され、患者は鏡像段階的統一へと導かれるのだ[[9]](#footnote-9)。

　だがこの理論には問題もある。すなわち、想像的な同一化は一方では、かの「症例エメ」のようなパラノイア的双数＝決闘関係に導くが、しかし分析経験のように、正常化に導くような想像的同一化も存在する。イマーゴの概念は両義的であり、曖昧さを残している[[10]](#footnote-10)。

しかしこの問題は、50年代になってセミネールが開始され、想像界より優位なものとして象徴界の理論が導入されたことで解決される。早くもこの時期において「ラカン対ラカン」が見て取れる。つまり、それまで主眼に置いていた想像界の彼岸として象徴界の理論が導入されたのだ。事実『自我』第四部の表題は「想像界の彼岸たる象徴界、あるいは小文字の他者から大文字の他者へ」である。すなわちラカンはここで、想像界の側から語っている。象徴界はいまだ、半ば未知のものとして扱われている。例えば、後のラカンのシニフィアン理論において主要な地位を占める隠喩と換喩の議論はセミネール3巻『精神病』が初出であり、この時点ではまだ導入されていない。象徴界の理論はいまだ未完成なものであり、50年代全体に亘って練り上げられていくことになる。

一方、『倫理』のセミネールにおいても再び大きな切断coupure（「ラカン対ラカン」）が表れ、現実界の概念が前景化しはじめる。注目すべきは、ここにおいてもそれまで主眼に置いていた象徴界（および想像界）の彼岸として根源的に失われた〈もの〉の領域が考察されたということである。シニフィアンから廃棄された〈もの〉は現実界に回帰する。先述のように、快原理は象徴界や想像界の側に割り当てられ、その彼岸である現実界の〈もの〉の周囲を巡っているものとされたのだ。

〈もの〉とは、精神現象における世界の組織化の、論理的にも時間的にも最初の点において、異質な項として現れ、切り離されるものです。「表象Vorstellung」の動き全体はこの〈もの〉の周囲を巡っています。フロイトが示したことは、この「表象」の動きが、ニューロン装置の機能と結びついた制御原理、いわゆる快原理によって支配されている、ということでした。象徴的過程が緻密に織り上げられている人間特有の適応上の進歩は、すべてこの〈もの〉の周囲を巡っているのです（S7: 71-72／邦訳上巻86）。

ここで、『自我』と『倫理』両者の「ラカン対ラカン」は、ともに、それまで中心的であったものの「彼岸」を提示することによって行われている点において類比的である。この彼岸の提示によって、それまで議論の中心に置かれていたものが二次的なものであり、むしろ一次的なものへの障壁であったことが明らかにされることになる。両者はともに、障壁の彼岸を提示することによって行われるのである。

　それゆえ、この二つのセミネールにおいてともに「快原理の彼岸」が取り上げられていることは偶然の一致ではない。フロイトもまた、快原理という、完結したシステムであるという見せかけをもち、理論の中心を占めていた概念の彼岸を提示することを要請された。死の欲動は、快原理のホメオスタシス（フロイトが「慣性」と呼ぶもの）を乱しにやってくるものであるが、このホメオスタシスは、理論のホメオスタシスとも考えられよう。構築された理論の彼岸から死の欲動がやってきてラカン対ラカンを迫るのだ。したがって、『自我』における快原理の彼岸が象徴界であり、『倫理』におけるそれが現実界であるという齟齬は、ラカンが前者においては想像界の側から、後者においては想像界―象徴界の側から語っているということに起因するのである。

　まとめよう。当初ラカンは想像界（イマーゴ）によって主体形成理論や分析経験を示そうとしていたが、想像的同一化は一方ではパラノイア的認識に、他方では正常化に導くものであり、曖昧かつ両義的である。そこで想像界の彼岸に象徴界が想定される。こうして想像界は二次的なものとなって、象徴界が根源に置かれる。ここでラカンは想像界の側から語っており、象徴界は彼岸から此岸のホメオスタシスを乱すとされる。こうして50年代ラカンの基礎を形成する象徴界の理論が完成されていくが、次第に象徴界だけでは不十分であることが明らかになる。こうして、象徴界と想像界のシステムは、その彼岸である現実界に属する〈もの〉に対する防衛であるとして、二次的な障壁として捉えられるようになる。ラカンはここでも象徴界―想像界の側から語っており、現実界は彼岸から此岸のホメオスタシスを乱すと言われるのだ。『自我』と『倫理』の二つのセミネールにおける理論的変遷は、こうした彼岸の発見によって行われるのである。

**3．手紙の回路**――**『盗まれた手紙』についてのセミネール**

　以上によって、『自我』における基礎的な議論、ならびにそれがラカンの教育のなかで有する位置についての基礎的な理解が得られたと思われる。ここで、より理解を確実なものにするため、『自我』のなかでおそらくもっとも有名と思われる、ポーの『盗まれた手紙』に対するラカンの読解について、基礎的な解説を提示してみたい。初出は『自我』の一講義であるが、これは後に大幅に加筆修正され、『エクリ』の冒頭に収録された。私たちはこの両者を読解の対象とするが、本稿は「『盗まれた手紙』についてのセミネール」の読解が最終目的ではないので、両者を同時期の議論として扱うことにする。すなわちS2LVとELVの間の理論的変遷や詳細な議論の差異については立ち入らない。

さて、ここまでの議論から分かるように、ここでラカンがこのテクストに見出すのは、登場人物皆をそれに従わせる象徴界の法loiの自律性である。どういうことか。ラカンはここから二つの場面を抜き出す。一方は大臣が王妃の手紙を盗み出すシーンであり、ここでは王の眼が掻い潜られている[[11]](#footnote-11)。他方はデュパンが大臣から手紙を取り返すシーンであり、ここでは警察の眼が掻い潜られている。この二つの場面を選んだのは両者が同じ構造をしており、第二の場面は第一の場面の反復となっているためだ。この構造は登場人物がとる役割の構造であり、第一の場面の大臣と第二の場面のデュパン、同じく王妃と大臣、王と警察の位置が対応している。そして両者に共通する第四の登場人物が存在する。それは手紙である。

　まず第一の場面について見てみよう。王妃は王に対して手紙を隠そうとするが、大臣によってそれを奪われる。ここで重要なのは、大臣が王妃の狼狽に注目し、手紙を隠そうとする彼女の意志を読み込むことよって、その手紙の重要性に気づいたということだ。つまり彼は手紙を間主観性の構造の中で捉えており、それゆえに王妃の戦略を逆手にとって手紙を盗むことが可能になったのだ。こうした一連の事態に、王は気づいていない。それは自我の気づかぬ間に無意識が作業していることと同様である。

　こうして大臣は手紙を手に入れるが、しかし彼もまた、手紙に支配されてしまっている。どういうことか。彼が王妃に対して優位であるためには、手紙の内容を明らかにしてはならない。つまりひとたび手紙が公開されれば、大臣は、王妃を脅迫して自分に有利なように政治を動かす、というようなことが出来なくなってしまう。つまり大臣もまた王妃と同じように手紙を隠しておかなければならないのだ。そのことによって大臣と王妃の間には、想像的な主人と奴隷の関係が成り立つ。

このように手紙はその内容――シニフィカシオン――を隠されたまま作動する。手紙にはなにやら王に知られてはならないことが書いてあるらしいのだが、その内容は明らかにされない。むしろ内容が明らかにされることによって、手紙の回路は破綻してしまう。つまり手紙の効用は純粋にシニフィアン的なものなのである[[12]](#footnote-12)。ラカンは象徴界をシニフィアン連鎖によって捉えるが、この寓話における手紙は、こうしたシニフィアン的な効用を明らかにするものである。

「大臣が状況から得ている優位性はしたがって、手紙から引き出されるのではなく、彼が知っていようといまいと、手紙が彼に割り振っている役割によっている」（E: 33）。こうしてシニフィアンはそれぞれの登場人物を超えてこれを支配し、登場人物はこの手紙の回路の中でとる役割によって優位にも不利にもなるのだ。手紙の回路はシニフィアンの回路であり、象徴界の法である。かくして手紙を手に入れた大臣は、この手紙の回路のなかでは手紙を隠すものの地位に置かれることになる[[13]](#footnote-13)。

　第一の場面において王妃は王から手紙を隠すことに成功した。大臣もまた手紙を隠すことに成功するが、それは警察に対してである。警察は手紙を探そうと躍起になるが、見つけることはできない。なぜならここで彼らは現実界（むろん、『自我』における意味での現実界）においてしか物事を捉えていないからだ。つまり「盗む」といった事象が成立するのは間主観性の次元においてでしかないのに、彼らはそのことを考えていない。それゆえにまんまと大臣の罠に引っかかるのだ。王妃と同じく、大臣も手紙を目につくような場所に置いている。しかし大臣は手紙に小細工をしており、手紙自体が汚れて破れていて重要ではない手紙なのだと思わせるようにしている[[14]](#footnote-14)。警察はこの罠に騙されたが、デュパンは逆に、これほどあからさまに注目する気をなくさせるような手紙が、これ見よがしに目につく場所に置いてある点に注目する。つまりデュパンは大臣の意図を読み込むことによって、自らの置かれている第二の場面が構造的に第一の場面の反復であることを察知し、手紙の場所を明らかにするのだ[[15]](#footnote-15)。かくして彼は大臣宅への二回目の訪問の際に手紙を取り返す。ここでは一見、王―警察に相当するような人物が部屋に同席していないが、実は確かに作用している。デュパンは大臣の注意を窓の外に向けさせるために屋外で鉄砲を撃たせるが、ここで大臣がわざわざ鉄砲を気にしたのは、警察が自分のことを尾行していると知っていたためである、とラカンは解釈する。つまり大臣が警察に気を取られている間に手紙を盗むのだ。かくして第二の場面は第一の場面の反復として完了する。

　しかし手紙の回路の必然性から言えば、今度はデュパンが手紙を隠すものの位置、つまり王妃や大臣の位置に置かれることになる。しかし彼はこの二者とは異なっている。なぜならデュパンは手紙を警視総監に売り渡すからだ。彼はこうした金銭的契約によって手紙の回路から身を引くのである。このことは、分析家が患者に料金を要求することの真正さを明らかにしている。分析家は料金の契約によって患者との想像的転移[[16]](#footnote-16)関係から脱却するのだ。

　大臣が王妃から手紙を盗んだのは、彼女に対して主人の立場に立とうとしたためである。すなわちここにおいて大臣は想像的関係（シェーマLにおかるa‐a’の軸）に縛られている。だが一方デュパンはこれを金のために行っており、こうした想像的関係からは脱却し、大他者（A）の場所に来ることが可能になる。分析家が捉えるべき無意識のパロールに対して想像的関係は抵抗として働き、分析家は患者との想像的関係から身を引かなければならない。それゆえ料金による契約が必要となるというわけである。ラカンの言葉を引いておこう。

　事実、いつデュパンが手紙の象徴的回路からおそらく撤退しようとするのかは私たち〔分析家〕と関係することだ、と思うのは正当ではないだろうか――私たちは、少なくともしばらくの間は、転移において私たちとともに留め置かれた*en souffrance[[17]](#footnote-17)*状態に留まるすべての盗まれた手紙の密使となるのだ。また私たちが、転移を、あらゆるシニフィカシオンをもっとも徹底的に無に帰してしまうシニフィアン――つまり、金銭――と同一視することによって中性化するのは、盗まれた手紙たちの転移に伴う責任ではないだろうか（E: 37）。

 こうしてデュパンは想像的転移を無効化し、そのことで彼は、手紙の回路から独り脱するのだ。

　みなが手紙の回路、つまり象徴界の法の中で動いており、勝利するためにはそれを受け入れ、遵守するしかない。しかし、そこで想像界の罠に陥れば待っているのは敗北である。大臣は第一の場面ではうまく象徴界を捉えることができたが、その後で想像界の罠に陥ってしまった。こうした罠を避け最終的に勝利するのは、金銭を目的としたデュパン、すなわち料金を受け取り、患者の中で作用する「留め置かれた」シニフィアンを取り出す分析家なのである。

**4．運命と倫理**――**オイディプスとアンティゴネーの選択**

『盗まれた手紙』の読解で明らかになったように、この時期のラカンは無意識の構造である象徴界を強調し、また主体がその法に従うことを重要視した。しかしながらそこに説教めいた単純なエディプス的規範主義を見て取るのは性急である。なぜなら繰り返すように象徴界とは彼岸の領域であり、象徴界の法は彼岸の法であるからだ。

　こうした態度をより明確に主張したのがソフォクレスの『コロノスのオイディプス』に対するラカンの読解である。そこには、『自我』当時のラカンが抱いていた、精神分析の到達点が明確に表れているものと考えられる。最後にその読解を行い、本稿を閉じることにしよう。

　オイディプス王において特徴的であるのは、彼が終始運命に動かされ続けることである。『コロノスのオイディプス』において彼が何度も主張するように、オイディプス自身はまったく知らぬまま、いつのまにか、彼の誕生前に神託が告げていた運命を実現してしまっている。つまり彼は父を殺し、母と交わったが、それはその時の最善の選択がすべて裏目に出た結果であり、彼の欲望ゆえではない。運命はこうしてオイディプスはじめ、その娘のアンティゴネーや息子のポリュネイケスなどの登場人物たちを動かしていくが、しかしそうした運命は、人間的な意味の領域とは別の場所で進展していく。「つまり、運命の本質的なドラマとは、慈悲や友愛など人間的感情と呼ばれるものに関わるものの絶対的欠如なのです」（S2: 269／邦訳下巻96頁）。運命は彼岸の領域で進行していくものだ。オイディプスは自分が無実だと繰り返し主張するが、この運命を受け入れており、ついには「神の定めたもうた世の終り」に従い、雷に打たれて、自分の人生を全うしようとする。それは、彼が自らに課せられた運命をすべて実現したからだ。こうして彼は快原理の彼岸に導かれるとラカンは言う。ここでエディプスが息子に吐く呪いの言葉は、癒されることを望まない、生に根本的な陰性治療反応としての死の欲動の満足である。そして彼はアンティゴネーら少数の人々だけを連れ姿を消すが、これは「囲いの外」に出るということである。ここにもまた、ラカンの「外」の修辞を見て取ることができる。

　つまりオイディプスはこうした彼岸の運命に従い、それを実現し、更には死んでいく。オイディプスが最後にたどりつく神との和解の場所は快原理の彼岸であり、つまり象徴界の法の場所である。この法の場所に来ること、それは先述した「自我がそれでなかったところのものになるということ、つまり自我が主体のいる点にやってくるということ」（S2: 374／邦訳下巻260頁）ではないだろうか。自我の彼岸でそれを統御している象徴界の法が明らかにされ、自我がその法の点――そこにこそ自我が存在する――にやってくるということをラカンは精神分析の目標として据えていた。そう考えれば、『コロノスのオイディプス』は当時のラカンのテーマを、幾分悲愴的にではあるが、明確に描き出したものとして捉えることができるはずである。

ところで、『倫理』においてもまたソフォクレスのテーバイ三部作が読解されているが、それは『アンティゴネー』であった。ここで、両者の態度は多分に対称的である。『コロノスのオイディプス』においてオイディプスが従ったような象徴的法は、『アンティゴネー』においてはむしろ侵犯されるものとなる。なぜなら、後者ではこの象徴的法の彼岸として〈もの〉の領域が導入されたからだ。象徴的な法は、想像的な見せかけの美と共に〈もの〉に対する防衛であり、障壁である。アンティゴネーはクレオンの法にも逆らって、兄を埋葬するというおのれの欲望に譲歩しない。精神分析の倫理は、もはや障壁となった法の彼岸にある現実界に対する倫理である。

　オイディプス、アンティゴネーともに、彼らが従うのは彼岸である。しかし両者の彼岸は異なっており、前者においては主体の運命である象徴的法であるが、後者においてはその象徴的法が防衛する現実界である。そしてまた、彼岸に対する態度の違いが、この二つの時期のラカン理論の特徴を示している。すなわちオイディプスの場合は運命の受け入れであるが、アンティゴネーの場合はむしろ主体的行為が注目されている。クレオンの法は善に奉仕する万人のための法であるが、彼女はそれとは相いれない自らの欲望の法を遵守しようとする。オイディプスが従うのは自らならざる運命であるが、アンティゴネーが従うのはむしろ自分自身である。

『自我』と『倫理』の二つの快原理の彼岸――象徴界と現実界――の差異は、こうした個人の領域の扱いの差異によっても特徴づけることができるだろう。『自我』における彼岸である象徴界は個々の生の限界を超えた大他者の領域であるが、『倫理』における彼岸はむしろ、大他者の法と折り合いをつけられない個人の領域に求められているのである。

**結論**

　本稿の目的は、ラカンの理論的変遷に位置付けながら『自我』を読解することであった。初めに私たちは基礎的な確認を行い、『自我』において象徴界がひとつの彼岸として議論されていることを明らかにした。次にポーの『盗まれた手紙』へのラカンの註釈を見ていくことによって議論を明確化するとともに、象徴的法へ従属することが重視されていることを確認した。最後に『コロノスのオイディプス』と『アンティゴネー』をそれぞれ『自我』と『倫理』の代表として捉えることによって、両者の差異を明確化した。その結果、『自我』で一旦は退けられた「個人」の重要性が『倫理』において復活していることが明らかになった。

『自我』の読解を進めていくうちに、本稿は期せずして『倫理』の理論的意義をも強調してしまった。しかしながらラカンがその議論に至ることができたのも、『自我』において導入された象徴界の理論の練り上げが前提として存在していたからだということは忘れてはならない。

かくして導入された象徴界の議論はその後50年代全体に亘って練り上げられ、隠喩と換喩、ポワン・ドゥ・キャピトンpoint de capiton、父性隠喩、欲望のグラフなどの議論が次々と生み出されていく。『自我』以後に導入された象徴界についての理論と、その変遷について明らかにすることは、残された今後の課題である。

**《参考文献》**

東浩紀『存在論的、郵便的――ジャック・デリダについて』（新潮社、1998）

小笠原晋也『ジャック・ラカンの書――その説明のひとつの試み』（金剛出版、1989）

ジュリアン、フィリップ『ラカン、フロイトへの回帰――ラカン入門』向井雅明訳（誠信書房、2002）

村井翔「『快原理の彼岸』再読――フロイトの個人神話と精神分析」『思想』997（2007-05）: 4-22

Lacan, J. *Ecrits* (Seuil, 1966)

Lacan, J. *Le séminaire LibreⅪ, Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse* (Seuil, 1973) ／邦訳『精神分析の四基本概念』小出浩之、新宮一成、鈴木國文、小川豊昭訳（岩波書店、2000）

Lacan, J. *Le séminaire LibreⅡ Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse* (Seuil, 1978)／邦訳『フロイト理論と精神分析技法における自我』上下巻、小出浩之、鈴木國文、小川豊昭、南淳三訳（岩波書店、1998年）

Lacan, J. *Le séminaire LibreⅢ, Les Psychoses* (Seuil, 1981)／邦訳『精神病』上下巻、小出浩之、鈴木國文、川津芳照、笠原嘉訳（岩波書店、1987）

Lacan, J. *Le séminaire LibreⅦ, L’éthique de la psychanalyse* (Seuil, 1986)／邦訳『精神分析の倫理』上下巻、小出浩之、鈴木國文、保科正章、菅原誠一訳（岩波書店、2002）

Miller, J.-A. 《Encyclopédie : article "Lacan, Jacques", rédigé pour l'Encyclopédia Universalis》 *Ornicar?* 24(1981): 35-46

Miller, J.-A.《Les six paradigmes de la jouissance》*La cause freudienne*, 43(1999) : 4-21

1. 例えばジャック・デリダのラカン論「真実の配達人」はELVを題材に取り上げてラカン批判を展開しており、わが国においては、東1998がこの論文を基にして超越論的シニフィアン（対象a）を巡ったデリダとラカンの対立図式を構築しており、このような読みの代表例と呼ぶことができよう。しかし本稿の狙いは同書の批判にあるのではなく、あくまでこのセミネール、ならびにELVをラカンの理論的変遷の中へ適切に位置付けながら読むことにある。 [↑](#footnote-ref-1)
2. この言葉は『思想』（岩波書店）に連載された向井雅明の論文「ジャック・ラカンの理論的変遷」に因むものである。本稿はラカン理論の全体的理解をこの論文、および向井の全ての仕事に拠っている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. Miller1999は、享楽を六つのパラダイムに分類しているが、そこで50年代前半（シェーマLに代表される）と後半（欲望のグラフに代表される）の間にひとつの区切りを入れている。私たちの主題はミレールのように享楽にあるわけではないが、しかしこの両者の区別は本稿においても適応可能であると考えられる。なぜなら私たちもまた、この時期のラカン理論をシェーマLに代表させるからである。 [↑](#footnote-ref-3)
4. ラカンの著作からの引用は本文中に略号で示す。Eは*Écrits*, SnはSeuil版の*Séminaire, Livre n*を表す。セミネールについては邦訳ページ数も併記する。 [↑](#footnote-ref-4)
5. のちにシェーマLにおいて見て取れるように、自我は正確には象徴界と想像界の交点に属するものとされる。しかし、ことに抵抗の側面から言えば、自我はもっぱら想像的領域のものとして扱われる。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 50年代後半からはファンタスムfantasmeの概念が導入される。このファンタスムは60年代における対象aなどの概念の導入によって練り上げられていき、その後70年代までのラカン理論の基礎に置かれるものである。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 確かにフロイトの「イルマの注射の夢」の読解においてラカンが現実界をトラウマ的な領域と関連させる場面もある（cf. S2 : 196／邦訳上巻273頁）。しかしこれについては後に60年代に明確化されるような現実界の意味の実験的な用法であると捉えられる。この時期のラカンは自ら考案した現実界の理論の取り扱いについて多分に試行錯誤的であり、しばしばその意味は揺らぐものと考えられる。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 反復の問題についてはセミネール11巻『精神分析の四基本概念』においても言及されているが、そこでは二種類の反復が区別された。それはオートマトンautomatonとテュケーtuchéであり、前者は「記号の回帰、再帰、執拗さであり、そこでは快原理が支配して」（S11: 53-54／邦訳72頁）いる。一方後者は「現実界との出会い」であって、「本質的に出会い損なったものとしての出会い」（S11: 54／邦訳73頁）である。つまりオートマトンは「いつもあるものが現れる」という反復であり、テュケーは患者が想起を行うも「いつもあるものの前で止まってしまい、その周りを周り続ける」という出会い損ねの反復である。この議論を踏まえれば、『自我』において快原理の彼岸として説明されている反復はオートマトンであり、それが60年代においてはむしろ快原理に支配されたものとして捉えられていることがわかるはずだ。 [↑](#footnote-ref-8)
9. ジュリアン2002: 49-50の解説を参照 [↑](#footnote-ref-9)
10. 以上の議論はMiller1981などでも紹介されている。 [↑](#footnote-ref-10)
11. ただし、ポーの原作では単に「さる高貴なお方」としか言われておらず、王や王妃とは言われていない。このようにラカンはしばしばポーのテクストを改変している。 [↑](#footnote-ref-11)
12. それゆえ、後の60年代のセミネールにおいては、手紙が純粋なシニフィアン、つまりシニフィエなきシニフィアンとして対象ａに関連させられることになる。手紙が後の対象ａの源流であることはラカン自身も『エクリ』の序文で述べているが（E: 10）、しかしこの段階においてはまだ対象ａの概念は導入されていないから、ELVにおける手紙に性急に対象ａの機能を読み込むことは避けなければならない。 [↑](#footnote-ref-12)
13. この「（真理を）隠すもの」の立場についてラカンは、それは本質的に女性的なものだといささか奇妙なことを言っている。ところで、後にセミネール18巻「サンブランでないようなひとつのディスクールについて」においてこの小説が再検討される際に、手紙を隠す王妃―大臣の立場がヒステリーのディスクールによって説明される。S2LVおよびELVにおける言及は、この解釈の源流となったものと遡及的に考えることができよう。 [↑](#footnote-ref-13)
14. 付記すれば、大臣はここで手紙が女性から大臣に宛てられたものであるように偽装している。すなわちここにも大臣の女性化が見て取れる。 [↑](#footnote-ref-14)
15. ここにおけるデュパンと大臣の違いは、前者が反復に注目しているということであり、こうした態度は多分に分析家のそれにも相当する。一方大臣のおかれていた第一の場面は原光景として捉えられるものである。 [↑](#footnote-ref-15)
16. この時期には、転移は分析が停滞した際に表れる想像的なものとしてもっぱら捉えられていた。cf. Miller1999: 5 [↑](#footnote-ref-16)
17. 【訳注】（郵便局に）留め置かれたというニュアンス。また「受取人不明の」という意味もある。 [↑](#footnote-ref-17)